

## 巻頭言

川村 浩

第二次大戦中にユダヤ人虐殺などで恐れられているドイツのヒトラーとわが国は同盟関係にあった。ではそのヒトラーが同盟国である日本や日本人に敬意を表していたかという、それが全く反対で、実は侮っていた。そのことは彼の著書「わが闘争」をよむと明瞭である。かれによると世界には文化創造型のアーリア人種（ここではゲルマン人、白人の意味）とそれより劣る文化保持型の日本人など、さらにそれ以下の黒人などの三種類の人種があり、日本人はアーリア人種の創造した文化を模倣し維持することは出来ても、新しい文化を創造する能力はないと明言していたのである。当時日本で出版された訳書ではこの部分は削除されていた。国民には隠していても、指導者たちがそのことを覚悟していたのならまだ救われるのであるが、それすらなかったのであるから情けない。そのことはドイツが日本に断り無しに突如独ソ不可侵条約を締結したときに、当時の平沼内閣がなすすべもなく「複雑怪奇」の言葉を残して退陣したことからも窺える。

何故こんな昔のことを今頃になってあえて書くかという、わが国の研究者は数の上ではヨーロッパ諸国に比べて多いと思うが、独創的な研究はいまだに少なく、ヒトラーの言葉があながち嘘とも言えないのではないかと何となく心配にな

ってきたからである。そのことは日本で国際学会を開催した場合に、本当に自分で金を払ってまで聞きにくる外国人が何人いるかということをも痛切に実感する機会に接したこともある。

独創的な研究の出発点はいうまでもなく、文献を精読して何が分かっていないかを知ることからはじまる。しかしいつもいつも文献ばかり気にしてそれに振り回されていると、結局は二番煎じの仕事に終わってしまう。

生理学の分野では戦前、慶応の加藤元一先生は神経線維麻酔部の非減衰伝導説を出して当時のドイツの大家Verwornの減衰伝導説を打ち破り、また神経や筋線維を一本に分けてall-or-noneの法則を証明され、微小生理学 (Microphysiology) の祖とさえ外国でいわれた。また満州医大（今の中国東北の瀋陽に戦前存在した日本の大學生による医科大学）の久野寧先生は環境条件による発汗の状況の変化を明らかにされ汗の生理学の祖とされた方である。しかし今の日本人の書いた教科書にこれらの業績は正当に引用されているだろうか。自国の業績を正当に評価できないということは、結局目の前の外国文献の後追いに忙しく、研究の流れを自分の頭でしっかりとつかんでいないということではなかろうか。方向性をつかんでいれば、何をなすべきかも明らかになるで

あろう。そしてそのような大局を目指す体系的な研究から外国人にも真に尊敬される学問が生まれるのである。

私の恩師の時実利彦先生は日本の脳研究の先駆者であり、また日本の多くの大學に脳研究施設をつくる努力をされた方である。先生の奥様より頂戴した多額のご寄付に基づき、昨年から脳の高次機能や生体の統合機能について独創的なすぐれた業績をあげた55歳以下の研究者を奨励助成する意味で時実利彦記念賞（100万円）をさしあげることになった。これも日本にすこしでも外国の後追い研究ではない、本当に独創的な研究が育つことを願っての試みである。（毎年6月頃締め切りで募集しているので、三菱信託銀行本店営業部公益信託時実利彦基金係宛照会していただきたい。）

時間生物学の分野からも是非受賞者がでるような立派な研究の発展を期待している。